

神奈川大学非文字資料研究センター
第二回公開研究会発表に関するコメント

上水流久彦

KAMIZURU Hisahiko

県立広島大学地域連携センター准教授

はじめに

本公開研究会では、日本による植民地期もしくは占領期の建築物（具体的には神社）が取り上げられているが、近年そのような建築物の一部は、現地で歴史遺産等に認定されている。歴史遺産等の認定は政府の方針、国民感情が関与するため、歴史認識や国家アイデンティティを知る重要な資料である。加えて、神社は、他の西洋の植民地支配にない日本の植民地支配の残滓であり、西洋式の建築物とは異なる日本特有の文化が刻印された象徴的なものである。したがって、日本との関係を視野にいたした対象地域の国家レベル、民衆レベルの歴史認識を理解する重要な手掛かりとなる（中島 2013）。

また、今回の公開研究会では中国と台湾の神社が取り上げられているが、複数の旧植民地や占領地での事象を比較する研究は、植民地支配の、もしくは占領の現在の有り様や影響を構築主義的に理解することを可能にする。例えば、武知、李百浩の二つの発表が示すように、現在の神社の有り様は同じではない。筆者の調査からも台湾と韓国、パラオでは異なっており（上水流 2016）、植民地期等の建築物の存在を「植民地支配があったから」と説明することは何ら意味をなしていない。旧宗主国のモノが現在も何らかの意味を持って、国家等によって異なる形で立ち上がる仕組みや要因を、過去から現在にいたる政治的、経済的、文化的要因と関連させて論じる必要性がある（上水流 2011）。

そして、このような研究は、植民地支配の問題を他の領域（政治や経済等）や権力との関係へと開くこと

を可能にし、植民地支配の問題だけに原因を帰さないことへとつながる。結果、植民地支配を強力な規定力のみとする捉え方を脱構築することにも寄与しよう⁽¹⁾。

I 台湾における植民地期建築物の現在と分析
枠組み

二人の発表について述べる前に、台湾における植民地期建築物が現在、どのようなまなざしを受けているかを簡単に紹介しておきたい。現在植民地期の一部の建築物が古蹟に認定されている台湾だが、1980年代以前は古蹟として認定されることはなかった。戦後は基本的に植民地支配の残滓と見なされる中で、破壊の対象とされた（松田 2013）。そうでなければ、官舎や行政機関等に活用されているか、または放置という状況であった。

台湾では1982年に文化資産保存法が制定されるが、例えば、1985年出版の『臺閩地区古蹟巡礼』（行政院文化建設委員会 1985）に記されるように、台湾の古蹟は中国の古蹟の類型のミニチュアで、日本式建築物や近代的建築物はその範疇になかった。だが、2004年に台北市文化局のシンポジウム資料は、古蹟を多様な価値観が表象され、「集合記憶」の問題だと明記する（台北市政府文化局 2004）。

実際、日本植民地期の建築物は、1990年代後半以降、次々に古蹟として指定されていく（上水流 2007b）。背景には台湾の本土化がある。元来、中国国民党（以下、国民党）政府は、台湾の統治にあたって中国本土も含めた中華民国全体を政治、文化、教育の制度設計、施策実施の基本としていた。だが、実際に統治し

ている台湾を中心とした体制に変えていくことが進み、台湾ではそれを本土化と言う。その過程で、中国で日本と戦った中華民国、もしくは国民党の歴史観から、台湾また本省人（日本の植民地期以前に台湾に移り住んだ者及びその子孫）の歴史観へと比重が移る。

その中で古蹟の有り様も変容し、台湾の歴史を語るモノになったのが、日本植民地期の建築物であった。日本植民地期の古蹟は、中国とは異なることを示す、国民党との歴史観に対抗する重要な道具であり、自らの歴史の一部として認識された。日本の植民地支配は良い悪いではなく、中国にはない台湾独自の経験というわけである（上水流 2007b）。

このような日本の植民地期の建築物に対する認識は中華民国の歴史観からすれば許されるものではなかった。外省人（戦後国民党とともに台湾に渡ってきた者及びその子孫）の、ある台北市文化局長は、「100年しか歴史がない台北で古蹟が100もあるのは多い」と批判し、ある外省人文化人は、最近の古蹟の指定基準はレベルが低くなったと述べた。

2000年以降はもうひとつの要素が加わってくる。経済活動や観光との連動である。文化資産保存法が改訂され、2000年には古蹟の再利用が可能となり、建築物をミュージアムやカフェ等にすることが可能となった。古蹟を快適さや快楽を充足するための消費空間に変える下地が台湾でも生まれた。

かつて植民した経験を持つ日本には、上記の日本植民地期の建築物の有り様の変化に対して二つの思いを持っている人々が見出せる。ひとつは「懐かしい昔の日本像」を見出す人々である。整備され、残されていく日本植民地期の建築物は、写真付きで書籍が多く出

され、日本人が観光する場でもある。もうひとつは、実際に台湾に住んでいた者の懐かしさである。彼らは戦後再訪し、自らが暮らしていた生活を思い起こす。そこには、住んだことがない日本人が昔の日本の姿を探して懐かしむこととは質的に異なり、ノスタルジー以上に、自らのものであったという思いが存在する。

台湾の日本植民地期の建築物は中国で日本軍と戦った外省人にとっては否定・破壊の対象であり、本土化推進派の本省人にとっては自らの歴史であり、これらとは無関係にその場を単純に楽しむ者も存在する。そこに日本人側から、日本の過去を見出すまなざし、それを観光として楽しむ姿、自らの所有物と見なす意識が混在する。このように複数のまなざし、意識を重ね合わせる場として、日本植民地期の建築物がある。写真1は、古蹟のひとつ、中山堂の展示において見学者が書いた意見である。そこには、「中国共産党は中国ではない」や「釣魚島は中国のものだ」、「日本一番」、「日本は血をもって贖え」等の多様な思いが存在している。

これらの植民地期の建築物の現在を筆者は、「外部化」と「内外化」、「内部化」、「溶解化」という概念で整理した（上水流 2016）。植民地期の建築物の破壊や放置が外部化である。自らの歴史の一部として認識し、古蹟化していく動きは、内外化と内部化の二つに分けることができる。いずれも、日本出自が不可欠な要素であり、日本出自ごと自らの歴史に組み込む。内外化は近代化を阻害したとする理解は自らの歴史としつつ、否定する側面を前面に出す。一方、「日本」を肯定的に理解し、他者との差異化を図る行為が内部化である。最後は溶解化で、「おしゃれ」、「木造建築が美しい」という感覚で捉えられる植民地期の建築物では、日本出自は消費する者には問題とされない。日本のモノは「おしゃれ」、「美しい」を構成する一部であって、歴史的な意味は消費されない。まさしく外部であった異質な「日本」が、その出自を脱色し、日常生活へ溶け込んでいく。そのような有り様が溶解化である。

ただし、これらの建築物と「日本」の関係は常に固定されているわけではない。状況に応じて、同じ建築物であっても、「日本」の意味づけが強調されることも

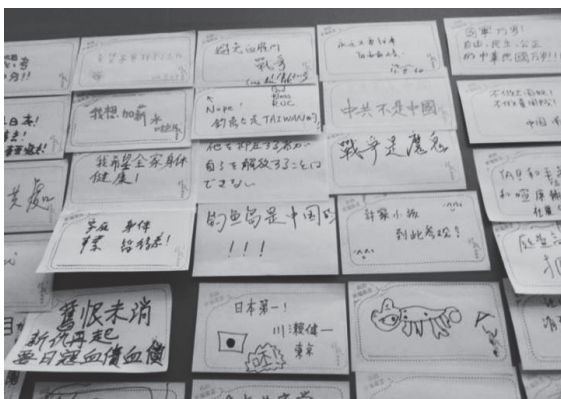


写真1 台北市中山堂の観光客のコメント

あれば、「日本」の意味づけが行われたいこともある。筆者は、それを脱着可能な「日本」(上水流 2011) という概念で整理を行った。

II 個別発表へのコメント

それでは、武知正晃「台湾における日本時代の建築物を見る眼差し」、李百浩「日本の敗戦後における旧南京神社の歩み」へのコメントを記したい。まず、両者に共通する点だが、いずれの発表においても日本の植民地支配、占領の「見証(目で見ることができ証)」として日本の神社を捉えることができる。ただし、その意味づけは、台湾の植民地期建築の分析で示したように不変ではない。各社会または日本との関係が変動する中で「日本」の位置づけは変化する。それゆえに、国内外の政治的、経済的、文化的有り様を視野にいれたうえで「いつの」有り様なのかを論じる必要がある。

もう一点は、日本の過度の読み込みの危険性を意識する点である。日本人が現地の「日本」を研究する場合、必要以上に日本的要素に注目することがある。筆者自身台湾の中の「日本」について話をした折に、台湾人研究者より台湾で最も大きな問題は中国であると指摘されたことがある。その点でいえば、台湾において、「日本」は変数でしかない。中国や国民党と対峙する中で利活用されるのが「日本」であり、日本植民地期のモノが常に「日本」を背負っているわけではない。「日本」が各社会でどのような状況に対応する中で用いられているかという視点は重要である。

さて武知の発表についてだが、神社の再建が台湾全体の「日本」に関する動向全体の中で考察されており、神社の位置づけがよく理解できた。神社に対して親近感が湧く素地を指摘する点は重要である。また、SNSでのやりとりに注目する点も興味深い。これまでの研究はインタビュー等を通じたもので、人々の認識に大きな影響を及ぼすSNSでいかに議論されているかを理解することは管見の限りなされていない。その点で武知の作業は、台湾の中の「日本」を理解するうえで必要な作業である。

しかしながら、その利点が問題をはらむ要因にもな

っている。次に質問も含め一層考察すべき点を五つ指摘したい。最初は、誰のまなざしか、という点である。既述した台湾の建築物の様相に見るように画一的なまなざしが向けられているわけではなく、世代や族群によって向けるまなざしは異なってくる。外省人も世代によって台湾に対する思いは異なる(コルキュフ 2008)。それだけに、誰からのまなざしなのかを整理したうえで、神社の位置づけを明らかにすべきであろう。今回ではSNSでの意見を援用しているが、SNSユーザーの属性に目を向ける必要がある。「日本」にむけるまなざしを台湾という形で一枚岩的に理解することはできない。

次に多元性の政治性である。分析においても多元性が重要な台湾社会を語る概念としている。だが、その多元性は外省人、客家、16の先住民族、閩南人の文化を対等に尊重するというものではない。例えば、民進党政権時代、特に台湾では先住民族を意識した多元的な台湾が語られるようになる。だがその意図は、中国本土とは自ら(台湾)が異なることを提示するために、先住民族の存在を強調し、南太平洋の国々との結びつきを強調したものであった。様々な歴史的背景や属性を持った台湾では、多元性はむしろ自らの立場を利するために利用されるものであり、台湾の多元性は決して無色透明ではない。それゆえに「台湾が多元であるから日本の神社を受容する」と説明することは、多元性にある政治性を看過することにつながる。

三つ目は、神社の再建が持つ意味は一義的に宗教的か日本的かである。日本側は神社の再建に対して、神社が持つ宗教的意味を織り込んでしまい、神道の受容という点まで含めて意味づけを行う可能性がある。この点は先ほどした日本側の日本的要素の過度の読み込みと共通の課題である。

筆者が管見する限り、台湾における神社の再建は、宗教的な意味合いよりも日本の象徴としての意味合いが強い。写真2は、台湾花蓮県吉安郷の慶修院という日本植民地期に建立された寺院で売られていたお守り等である。日本の駄菓子と一緒に土産屋で売られていた。駄菓子とお守りが同じスペースで売られることは、日本の宗教施設では見ない。お守りも駄菓子も日本を象徴するものに過ぎない。神社の再建といっ



写真2 慶修院で販売されているお守りなど

も、日本が一義的な意味を持つことを考慮し考察を進めるべきであろう。

四つ目は、「日式（日本式）」や「和風（日本風）」として提示される「日本らしい」ものをどう理解するかである。神社の再建も既述したように日本における神社の再建ではない。台湾社会向けに変換された「日本らしい」ものとしての神社の再建に過ぎない。筆者は、台湾の「和風」とされる温泉の分析を行ったことがあるが（上水流 2007a）、そこでは台湾が受容できる、台湾人が消費したくなる「日式」、「和風」へと日本の温泉文化が変換されていた。今回の神社の再建についてこの点から述べれば、台湾人が消費可能な「神社」の再建であり、それゆえに宗教施設というよりも日本のシンボルとしての意味合いが強くなるものと思われる。

最後は、神社の再建の意味合いが台湾ナショナリズムの中で、または今後の日本に対する感情がいかに変化するかである。台湾は、本質的に「親日」と考える向きが日本には見られるがそうではない。日本に対する複雑な感情は、台湾側からも分析され、単純に親日国家と理解することはできない（何義麟 2000、黄智慧 2003、《思想》編委會 2011）。最近では、2016年4月末に沖ノ島島の付近で漁を行っていた台湾漁船を海上保安庁が拿捕した事件によって、台湾では日本への強い批判が生まれた。台湾ナショナリズムを背景とした台湾の自尊心を逆なですることが起これば、日

本への反発は容易に起こり得る。

したがって、親日台湾という理解から神社の再建を理解することは、台湾における複雑な日本の在り方を読み誤るものである。複雑な日本への感情、台湾ナショナリズムを踏まえたうえで理解しなければ、植民地支配に関する良質な研究も親日国家台湾像の再生産に加担するに過ぎない。

次に李百浩発表だが、建築物の観点から詳細に建築物の構造を明らかにし、その歴史的経緯を丁寧に追っていることは、筆者が特に研究している台湾の建築物を考察するうえでも参考となった。この作業によって時代によっていかに取り扱われたかを通時的に見ることが可能となり、社会状況において日本の占領の残滓が一定のものではなく、変遷することが実際に理解できた。

加えて、占領期前後、また現在の建築物を取り囲む周囲の状況を理解することで、土地の利用という観点から時代が異なっても類似した点があることに気づかされた。建築物が持つ「土地」との関係へ目を向けることで、社会的環境に加えて地理的条件も視野にいれた分析が必要である。

これらの意義を一層深めるために、四つの疑問や質問を述べたい。一つ目は、南京の神社も含め、中国における旧神社が、愛国主義教育模範基地になっているか、である。中華人民共和国の文物保護だが、1982年に中華人民共和国文物保護法が成立し、国家レベルでは国家文物局の所管となっている。2002年に改正され、そこでは目的が「中華民族の優秀な歴史的文化遗产を継承し、（中略）愛国主義及び革命伝統教育を推進し…」（第1条）とされ、保護する対象は、「重要な歴史的事件、革命運動及び著名な人物に関係し、並びに重要な記念的意義、教育的意義及び史料価値のある近現代の重要な史跡、実物及び代表的建築」である（鎌田 2003、王 2013）。これらからは、近現代の代表的建築が保護の対象になっていることと、「愛国主義」の推進が目的となっていることがわかる。

愛国主義は、江沢民が国家主席の時代に強く推進され、1997年に初めて愛国主義教育模範基地が指定された。2001年にも指定されている（岡村 2004）。江沢民国家主席時代の愛国主義教育のもと反日が強化され

たことは周知の事実だが、習近平が国家主席になってからは「中国夢」(中国の夢)が強調され、中国の大国化、大国意識が広がっている。その中で、日本への反日感情が醸成される傾向にある。このような歴史認識において、南京の神社に代表される中国における神社は、反日または抗日の対象として、破壊されるべき、また攻撃される対象なのであろうか。それとも、現地ではあまり気にされていない存在なのであろうか。

このような疑問は、旧満州国(中国では「偽満州」と称される)の一部であった遼寧省大連、黒竜江省ハルビン市、遼寧省瀋陽市(旧奉天市)、吉林省長春市(旧新京市)における建築物の筆者の調査からによる。写真3は、長春で見た旧満州国の交通部(交通省)の建物についての説明板だが、そこには、「銘記国恥、振興中華、讓祖国更加繁榮富強(国の恥を忘れずに中華を振興し、祖国を一層繁榮させ富強にしよう)」と記してある。旧満州の建築物は「国の恥」を思い起こす道具とされている。しかし、中国の人々が熱心にこれらの建物を見学するかといえば、そうでもない。

一方で愛国主義教育模範基地に指定されている黒竜江省の「侵華日軍第七三一部隊罪証陳列館」では、中国国内からの見学者も多く、日本語を話すことが憚られるほどの雰囲気があった。旧交通部の建物とは対照的であった。ここからは、日本の支配、占領等の残滓をどう扱うかは、一定なものではないことがわかる。

二つ目は省での違いをどう考えるかである。旧満州の調査では、省ごとに旧満州の建築物への姿勢が異なる点を実感した。例えば大連や瀋陽では、大連ホテルや瀋陽ホテルが現在も使用され、モダンな建築物として観光に活用されている側面が強かった。他方、吉林省では観光に活用されるような雰囲気は感じられなかった。あくまでも「偽満州」の歴史の「見証」というものであった。南京市には南京大虐殺記念館もあるが、江蘇省や南京市が政策として、日本の占領をどのようなものとして扱っているのか、省の政策を踏まえたうえで、南京の神社が如何なる位置づけであるか議論する必要がある。

三つ目は、時代による違いである。通時的に建築物の変遷を説明している点は評価できるが、もう少し政



写真3 長春市にある旧満州国交通部に関する説明板

策や中国の歴史認識の変遷と関連づけて議論することはできないだろうか。例えば吉林省にある張学良の旧住宅は、1985年に市に、1988年に県に、1996年に国(國務院)に指定された。一方、日本の支配に関わる「偽満州國務院旧址」の指定は、省は1983年だが、国は2013年である。「偽満州国皇宮旧址」でも国家による指定は2013年である。筆者の旧満州国での調査によれば、旧満州国に関わる建築物は、2010年代前半に国家レベルで保護(全国重点文物保护单位)の対象となっていた。つまり、旧満州国に関わる建築物の保護指定は、張学良のような国家の英雄に関わる建築物と比べるとかなり遅い。

2011年以降、尖閣諸島をめぐる問題、習近平の国家主席就任があることを考慮にいれれば、国家の政策との関連を意識せざるを得ない。南京神社の通時的分析においても、国家や省での政策の流れへ目配りをすることで、日本の支配や占領に関わる建築物がいかなる意味づけをなされてきたか、その複雑な様相を知ることができよう。

最後は国民党の痕跡と日本の痕跡との違いの比較である。南京は、南京国民政府がおかれた都市である。また李百浩発表でも示されるように、国民党に関わる建築物も南京神社の敷地内には存在している。神社を通して日本の位置づけを知る場合、国民党に関わる建築物等の比較は、有益な手法ではないだろうか。周知のように長年にわたって中国共産党(以下、共産党)

と国民党は中国統一のため争ってきた。台湾の外省人の中には、反日よりも反共の意識が強い人も多くいると聞く。また台湾では国民党が、中国では共産党が抗日では大きな働きをしたと記してあり、相互に批判する対象であった。

だが、2000年に台湾に民進党政権が初めて誕生してからは、敵の敵は味方の論理から、共産党と国民党の和解が進み、2005年4月には連戦国民党主席（当時）と胡錦濤共産党総書記（当時）が北京で正式な会談を行った。その後、両党の交流は深化し、また2015年末には台湾の総統（大統領に相当）選挙直前に馬英九と習近平の会談が行われた。

対立から融和へと変化した両党の関係は、国民党が中国に残した痕跡の扱いをどう変えたのだろうか。それは、日中友好と日中対立の中で揺れ動く日本の占領の痕跡が中国で持つ意味を考察するにあたり、重要な手掛かりになるものと思われる。

III 台湾と中国を比較するために

二つの発表を踏まえて、ここでは台湾と中国の日本

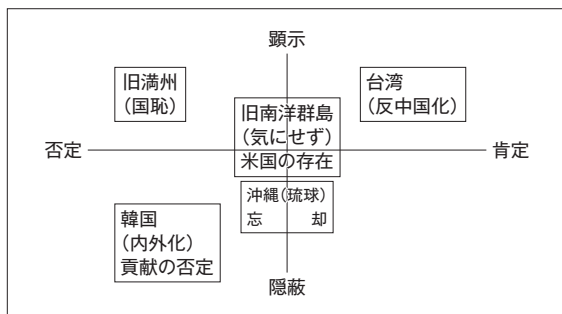


図1 「日本」の扱われ方



写真4 林百貨店の土産物

の支配、占領に関わる建築物を分析する筆者なりの考えをまとめておきたい。その初めに現在の大きまかなという限定付きであるが、日本が植民地支配等を行った地域の日本の建築物の位置づけを筆者なりにまとめてみると、図1のようになる。理由は紙幅の関係から別稿等⁽³⁾で述べるが、台湾では中国とは異なることを示すために日本の植民地期の建築物を肯定的に語る傾向にある。写真4に見るように、観光資源として「日本」を活用する側面も強い。写真4は台南にある日本植民地期の林百貨店で売られていた商品であるが、「デパート」とカタカタを用いて日本の雰囲気強めている。ここまで行うところは、他の国には見られない。

一方、韓国では日本植民地支配については国家の発展に負の影響を与えたとするものの、各国との比較という点で述べれば、公には見せない傾向にある。旧満州では長春の建築物の有り様に示されるように「国の恥」、「偽満州」として明記することで、日本への批判、ひいては愛国教育と結び付ける方向にある。

評価が語られにくいのが、旧南洋群島と沖縄（琉球）である。旧南洋群島については、日本の敗戦後、アメリカの存在があまりに大きいため、アメリカからの歴史観のもとで、植民地期の建築物を通じた「日本」を感じることは難しい。「気にしない」という感覚がある。沖縄（琉球）の場合、近代的な建築物は那覇を中心に建てられたが、沖縄戦の記憶があまりにも大きく、忘却されている。

これらはあくまでも現在の在り方を五つの地域や国を比較し、相対的に示したものである。重要なことは、それぞれの在り方を固定的に見るためではなく、「日本」の位置づけが各国によって異なること、したがって「植民地があったから」で終わらせず、その理由を考察する必要があることである。

台湾と中国（旧満州）における「日本」の違いを生み出した要因だが、まずは日本への親近感である。台湾では最も親しみを覚える国として、米国や中国がかけた台であるのに対して、日本は40%から50%ほどである（上水流2016）。現在、中国では対日感情は良⁽⁴⁾くなく、悪化していることはメディアの報道でも見聞⁽⁴⁾できる。

台湾の現状を生み出した要因として、日本との緊密

な政治的、経済的、文化的関係に基づく日本への親近感の醸成がある。台湾では、経済的富の源として日本が存在していた。1970年代以前は、軽工業の分野で日本企業との連携が多く、日本語を基盤に日本から多くの投資、合弁企業が台湾には生まれた。旧満州では大連では日本語に堪能な者も多く、立地もよかったため多くの日系企業が存在し、対日感情は悪くない。だが、大連以外では特に日系企業の存在が多いわけではない。日系企業によって潤っているという言説を聞くことは現地調査ではなかった。

テレビコマーシャルでも日系企業の存在は大きく異なる。台湾では、多くの番組でダイキンやトヨタ等の日本や日系企業の宣伝を見ることができ、台湾の人々の生活の隅々までその商品を感じ取ることができる。だが、旧満州を含め中国の調査においてテレビでそのような宣伝を見ることはできなかつた。⁽⁵⁾

文化面では、台湾においては日本の存在感は大きい。日本資本による雑誌が創刊・発売され、サブカルチャーが受容され、日本大好き族とされる「哈日族」もいる。日本番組専門のケーブルテレビがあり、10数年前と比べるとやや勢いに陰りが見えるとはいえ、時代劇からバラエティまで見る事が可能である。他方、中国では日本資本による雑誌は見ることができない。そればかりか、旧満州に限らず中国全土で、日中戦争を題材とした日本を悪者とするドラマを見ることができ、尖閣諸島をめぐる反日デモの参加者の分析では、反日ドラマの影響が実際指摘されていた。⁽⁶⁾

政治面では、台湾は比較的安定している。反日的な思想を持つ馬英九の政権下でさえ、尖閣諸島については中国に比べると抑制的な政策がとられ、市民感情としても大きな問題とはならなかった。また同じ価値観を有する国家であると双方が考えており、日本は自由主義国家という点では米国に次いで重要な存在であると認識されている。他方、中国では、1980年代～1990年代に比べると、大国化するにつれ日本を軽視する風潮が見られる。尖閣諸島をめぐるのは、互いに激しい応酬がなされ、双方が船を出し、直接応酬している。これらの出来事によって、歴史認識をめぐる互いに不信感を持ち、日中関係は不安定なものになっている。

これらの政治的、経済的、文化的状況は台湾と中国における「日本」の位置づけに対して、親近感という点で大きな違いを生み出している。決して、過去の支配によってのみ現状が規定されるわけではない。

加えて、終戦直後の状況が「日本」の位置づけに影響を与えている。国民党は日本に勝利したが、国共内戦に敗れたことによって台湾に敗走した。ここに中華民国台湾の戦勝国と戦敗国の二つの顔がある。敗走によって台湾は国民党の統治下におかれ、その結果、中国統一を願う中華人民共和国との対峙を生み出した。他方、旧満州では日本は倒すべき敵であり、倒した敵であった。旧満州国は解放され、国共内戦によって勝利した共産党が支配する中国の一部となった。

この状況は歴史認識の点で二つの国家に大きな違いを生み出した。台湾では、終戦直後本省人に弾圧を加えた国民党への激しい反発が生まれ、二つの異なる歴史記憶主体を生み出した。国民党の統治を肯定的に捉え、中華民国という国体を支持する者と、その統治を否定し、台湾という国体を支持する者として。これらの二つが国家の形をめぐる大まかに述べれば、既述したように「日本」が否定され、肯定された。

だが、旧満州国では、少なくとも表面に出る形で日本の支配について肯定されることはなく、肯定か否定かさえ議論されなかった。どちらかといえば「偽満州」とされるように、否定されるものであった。対立する歴史記憶主体は、その終戦直後の状況から生まれることはなかった。

ここに記したことは、個別には周知のことである。だが、そのような事実が相互にいかに関与しているかを丹念に整理し、把握する作業は「日本」の分析において必要である。中島はこの点を「政治的要因」、「社会の変容」、「経済発展の度合い」、「文化伝統」、「支配交替の〈刻印〉」と整理する(中島2013)。このような作業のためにはコメントで記した通時的な「日本」の意味づけの違いや、属性による違い、国民党等の他の支配の残滓との比較、地域差等を視野にいたした分析が基礎的作業として不可欠である。

おわりに

文字によって意味する内容が限定される文字資料でさえ、文言への解釈には幅がある。非文字資料の神社は、その文字による制限がない分、一層意味合いは多様となる。時には、その存在が無視され、放置される。また別の時には格別なものとして取り上げられ、利用される。それも属性等の違いによって国民全体で共有されるものではない。日本と対象国との関係や、権力側の在り方によって異なる意味合いを持つこともある。このような非文字資料としての神社を分析する場合、本公開研究会が、歴史学、建築学、文化人類学、社会学を専門とする研究者によって議論されたように多角的、かつ多くの学問分野からのアプローチ、共同作業が必要となる。

そして、日本の支配のもとで建てられた神社の研究に関するこれらの作業は、日本の支配という過去の探求のように見える。だが、実際は今を照らし出す作業であり、現在を生きる我々が、過去にいかに向き合っているかを明らかにする作業でもある。旧植民地等にある日本の神社をめぐる課題は、したがって他者ではなく、我々の問題である。この点を痛感させられた公開研究会であった。

謝辞

本稿の主資料は、JSPS 科研費 17251011、JSPS 科研費 22251012 の支援に基づいて収集しました。調査では多くの方々に協力をいただきました。感謝申し上げます。

注

- (1) 詳細は、上水流 (2016) に詳しい。なお、本文の一部は上水流 (2016) と重複している。
- (2) 各国の建築物を個別に見ていくと、韓国でも否定が顕示されているモノもあれば、観光資源としている場合もある。台湾でも、日本支配の負の遺産として明示するものもある。
- (3) 上水流 (2016)、または現在執筆中の論考で詳述する予定である。
- (4) 大連はその歴史的な理由から別だと語る中国人もいる。2011年の尖閣諸島の一部国有化によって中国では反日デモが各地で起きたが、大連ではなかったことをその証左にあげる。

(5) ただし、日本商品の質の良さに対する語りは、台湾でも中国でも聞くことはできた。

(6) 一方で、若者においては日本のサブカルチャーの浸透も見られる。

引用文献

上水流久彦 2007a「台湾の温泉における『和風』～日本植民地時代の遺物のその後」『温泉研究』4:16-24。

上水流久彦 2007b「台湾の古蹟指定にみる歴史認識に関する一考察」『アジア社会文化研究』8:84-109。

上水流久彦 2011「台北市古蹟指定にみる日本、中華、中国のせめぎ合い」植野弘子・三尾裕子編『台湾における〈植民地〉経験 日本認識の生成・変容・断絶』pp.25-53、東京：風響社。

上水流久彦 2016「台湾の植民地経験の多相化に関する脱植民地主義的研究——台湾の植民地期建築物を事例に——」三尾裕子・植野弘子・遠藤央編『帝国日本の記憶』pp.261-288、東京：慶應義塾大学出版会。

鎌田文彦 2003「短信：中国 文化財保護法の改正」『外国の立法』215:149-152。

ステファン・コルキュフ 2008『台湾外省人の現在——変容する国家とそのアイデンティティ』上水流久彦・西村一之共訳、東京：風響社。高格孚 2004『風和日暖：台湾外省人與國家認同的轉變』、台北：允晨文化。

松田ヒロ子 2013「台湾における日本統治期の遺構の保存と再生——台北市青田街の日本式木造家屋を中心に」蘭信三編著『帝国以後の人の移動——ポストコロニアルリズムとグローバリズムの交差点』pp.833-865、東京：勉誠出版。

王盈 2013「文化財建造物の保存修理についての日中比較」『学位論文梗概集 2013』(筑波大学)。

中島三千男 2013『海外神社跡地の景観変容——さまざまな現在 (いま)』東京：御茶の水書房。

《思想》編委會 2011『思想 台湾的日本症候群』14 台北：聯經出版。

何義麟 2000「『日台親和』の虚像と実像——植民地支配の歴史経験は国際協力のモデルか?」『インパクション』120:93-98。

黄 智慧 2003「ポストコロニアル都市の悲情——台北の日本語文芸活動について」橋爪紳也編『アジア都市文化学の可能性』pp.115-146、大阪：清文堂出版。

岡村志嘉子 2004「中国の愛国主義に関する諸規定」『レファレンス』647:69-80。

編集室注：本研究ノートは、2016年2月27日神奈川大学横浜キャンパス1号館で開催された2015年度第二回公開研究会「台湾でなぜ神社の復興が見られるのか? 中国・南京神社の社殿はなぜ壊されなかったのか?」(主催：神奈川大学非文字資料研究センター)での武知正晃氏、李百浩氏の発表に対するコメントを原稿化したものである。